

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

植民地国家から国民国家へ継承された博物館： 台湾総督府博物館の設立と原住民族コレクション

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009073

二 植民地国家から国民国家へ継承された博物館

——台湾総督府博物館の設立と原住民族コレクション——

野林厚志

はじめに

本稿の目的は国家と博物館との関係を、国立台湾博物館が日本による統治時代に植民地博物館として設立された経緯と社会の中での位置づけ、第二次世界大戦終了後に台湾の政権を掌握した中華民国の博物館に継承されていった過程を通して考えることである。同時に、植民地国家と国民国家という枠組の中で様々な歴史経験をしてきた台湾原住民族の人々が、日本統治時代における植民地博物館においてどのようなとらえられかたをされ、それがどのように博物館の中で継承されていったについても合わせて考えてみたい。

公立、私立を問わず、博物館の本来の機能は資料の管理と活用である。一方で、博物館は展示という公共に開かれた空間を通して、様々なメッセージを来館者に伝えるための媒体としての機能も有している。実はこのことは、博物館がもつ公共性という属性を保証する重要な点として考えておかなければならない。すなわち、博物館は器物が安置

される場所ではなく、つねに公共との接点を保証する場所でなければならないということである。この点については、高橋雄造が、博物館とコレクションとの相違はその公開性の有無に依るものであり、公共施設としての博物館では世俗性も保証されている必要があると論じている〔高橋雄造 二〇〇八…一五〕。また、松宮秀治は西欧におけるコレクションの制度化とミュージアムの思想の根元は、キリスト教の宗教権力に対して世俗権力の優位性を確保したという欲求であると同様な見方を示している〔松宮秀治 二〇〇三…二五九〕。

一方で、国民的、国家的な位相で開かれた博物館はナショナリズムを昇華させる空間にもなりうる。これは、一九世紀以降、世界各地で挙行されていた万国博覧会や類似した博覧会にも同様な性格を見て取れるが、とりわけ、規模の大きな国立博物館には、その国を代表する事物や文化財が展示され、それは文字通り、その国のありようや文化に対する態度を示す役割を果たしていくことになる。この点が、同じ博物館という名前をいただきながら、国立という名称がつく博物館とそうでない博物館とが公共空間に対して有する影響の程度の相違を生みだすものになると言ってもよい。筆者はこの点について、台湾において民主化が実現されていくなかで建設された国立台湾史前文化博物館を事例として論じたことがある〔野林厚志 二〇〇八〕。対大陸中国との関係の中で、原住民族文化が台湾の独自性を示しながらも、それらの展示は政治的な中立性を担保することが可能であるという点において、台湾における新たなナショナリズムを構築する要素の一つとして博物館の中にとりこまれていくことについて言及した。一方で、国家の威信の発露やそれにとまなうナショナリズムの啓発といったものは、国内の博物館もしくは競合的な国家の成員等の目にさらされる博覧会等で見られる現象なのかもしれない。一方で、国民国家の施政者がつくりあげる植民地博物館において収集され展示されるものが、植民地住民に対して宗主国のナショナリズムを高揚させたり、外部からの来訪者に宗主国や植民地の威信を受けつけるような性質を有してきたかどうかについては、具体的な事例をもって検証する必要がある。さらに具体的に述べるならば、植民地博物館は、植民地が宗主国の支配から脱却した後、当該社会の

中でどのように位置づけられていく可能性があるかを考えることによって、国家が博物館に何を求めていくのかということを明らかにする手がかりが得られるであろう。

こうした観点から、植民地時代の台湾において設立された国立級の博物館である総督府博物館のコレクションや展示の内容は、当時の施政者であった日本の、台湾社会に対する態度をある程度反映していたであろうし、博物館の機能に対する考え方もそこに表われていると言ってもよい。

一方で、総督府博物館は日本が撤退した後も、台湾の中で国立級の博物館として存続してきた。新たな政権のもとで旧来の植民地博物館がどのように位置づけられたかを考える事は、国民国家にとって博物館がどのような意味をもつ施設なのかを考える糸口になるであろう。そこで、本稿では、台湾総督府博物館が当時の植民地であった台湾においてどのように社会の中に位置づけられていったかを概観したうえで、第二次大戦後に国民国家としての歩みをはじめた台湾の中で、それがどのようにに継承されたかについて考えてみることにする。

1 台湾における国立博物館の設立

現在、台湾では「国立」とよばれる博物館が六つ存在する。台湾において設立された順にこれらを列挙すると、国立台湾博物館、国立歴史博物館、国立故宫博物院、国立自然科学博物館、国立台湾史前文化博物館、国立台湾歴史博物館となる。ただし、国立故宫博物院の前身となる機関は大陸において存在していた。

台湾における本格的な博物館が開館したのは一九一五年である。当時の植民地政府であった台湾総督府が主導し、一九〇八年に最初の博物館の建設が計画され、七年後に台湾総督府民政部殖産局付属紀年博物館が開館した。この博物館は後に台湾総督府博物館、第二次大戦直後には台湾省立博物館と名称を変え、台湾省の廃止に伴い国立台湾博物

館と改称し、現在に至っている。

第二次大戦が終わり、中華民国政府による台湾統治が開始され、旧植民地時代に台湾にはいりこんだ「日本的」な性格を帯びた芸術や著作は公の場から姿を消した。逆に大陸から芸術家たちが台湾に移住し、彼ら自身の創作活動を台湾を拠点に行なうようになっていった。こうした状況のもとで、一九五六年に開館したのが台北にある国立歴史博物館である。国立歴史博物館は収蔵資料がほとんどないことから、当初「真空館」と揶揄されたこともあったが、日中戦争時代に日本が中国大陸で収奪した資料ならびに、河南省立博物館から運びこまれた安陽殷墟の出土品をコレクションに加えることによって、中国史と中国美術を主題とする博物館として開館することとなった〔林泊佑二〇〇二・八一九〕。この九年後の一九六五年には、台北の郊外に大陸中国の歴代王朝の宝物を公開、保存、管理することを目的とした国立故宫博物院が完成した。

台湾において、国立歴史博物館と国立故宫博物院という二つの大型博物館の設立は歴史認識の問題と深く関わってきたと言つてよいだろう。第二次大戦が終結し、日本が撤退した後、入れ替わるようにして台湾に入り政治的な支配層となった外省人は、台湾を中国として扱う政策を強力に推し進めた。外省人にたいして本省人とよばれた従来の漢族系住民の母語である福（佬）語や客家語を公的な場面から排除し、北京官話にもとづく普通語を国語として定めた。中国史が台湾の正史とされ、学校の教科書を通して、またラジオやテレビといったメディアや博物館といった社会的施設を通じて台湾の人々にそれがすり込まれていったのである。

こうした、中国ナショナリズムを強調する博物館に対して、一九八〇年代にはいると、教育的な機能をもった博物館や施設が作られるようになっていく。一九八六年に開館し、一九九三年に全館を完成させた台中の国立自然科学博物館の設立の第一目的は、自然科学の理解を市民に促すことであり、特に学校教育への寄与が期待された博物館と位置づけられた。その後、日本統治時代から発掘作業が行われてきた台湾東部にある大規模な考古学遺跡、卑南遺跡を

中心とした国立台湾史前文化博物館が二〇〇一年に開館した。この博物館は先史時代と原住民族文化とを展示の主題とした博物館であり、中国史と台湾史に関わる史観イデオロギーの対立には直接には舐触しない性格をもちあわせたものである。

このようにしてみると、博物館という公共の装置を通して、中華民国施政下の台湾において中華という基盤から出発しながらも、台湾が様々な要素をもちあわせた土地であるということが博物館の中で認識されていたことは興味深い。そうした過程の一つの到達点で、台湾の歴史を主題に扱う国立台湾歴史博物館の設立であろう。すでに国立歴史博物館が設置されているにも関わらず、台湾の歴史を扱うことを主たる目的とした国立博物館が設立されたということは、台湾政治が台湾ナショナリズムをかなりの程度、容認したことを物語っている¹⁾。

台湾における六つの国立博物館の性格を考えた場合、その前身を日本統治時代に求める国立台湾博物館以外は、それぞれが設立された時期における社会的な背景に強く影響されてきたことがうかがえる。とりわけ、一九八〇年代以降、台湾の民主化が進行していくと同時に、中華ナショナリズムとは距離をおいた博物館が作られていったことには留意しておく必要がある。それぞれの博物館はあからさまに中華ナショナリズムに反するのではなく、中立的な性格をもつ自然誌からはじまり、先史学や考古学、原住民族文化といった、直接的なイデオロギーの衝突が回避される部分が続いて展開したうえで、新たな歴史観の構築に資する博物館が設立するにいたつていえると言える。一方で、国立台湾博物館は、前身となる博物館が設立されたのが日本の統治時代であり、戦後の台湾社会の要請があつて設立された博物館ではないことに留意しながら、稿を進めていくことにする。

2 台湾総督府博物館

(1) 沿革

中華民國時代に設立した五つの博物館は時代背景に応じた性格を最初から与えられてきた。一方で、日本統治時代に設立され現在まで存続している国立台湾博物館はそれらと必ずしも同じような成立の経緯を有しているとはいえない。一九九九年に出版された『台湾省立博物館創立九十年專刊』ならびに二〇〇九年に出版された特別展示会の図録『百年の物語』の記述をてがかりに、統治時代における設立の過程も含めながら、当時の博物館の社会的な位置づけを考えていくことにする。

国立台湾博物館の起源は、台湾総督府の民政部殖産局が管轄して一八九九年に設置した商品陳列館にもとめることができる。当時の陳列館には工業製品、商品が陳列されていたほか、台湾の教育や文化に関する文献資料、書籍が集められた資料室も設けられていた。こうした状態が一〇年続いた後、台湾総督府は博物館の設置を本格的に決定し、一九〇八年に台湾総督府民生部殖産局附属博物館（以後、殖産局附属博物館）が開館した。博物館の建設は同年に開通した南北縦貫鉄路全線開通の記念事業の一貫でもあったともされている。博物館の設置目的は、台湾に関する学術資料、工芸、産業等に関わる標本を収集、陳列し、公共の閲覧に資することとされており、この博物館は設立当初から台湾を知るための博物館として位置づけられていたことが理解できる。展示資料ならびに収蔵資料は、地質および鉱物、植物、動物、人類（蕃族）、歴史及び教育、農業、林業、水産、礦業、工芸、貿易（輸入）雑の一二部門に分類されていた。産業理解という目的は当時の台湾社会にむけて重要であったと考えてよい。明治維新を果たしたとはいえ、植民地経営は未経験の大事業であった。さらに国内整備も必ずしも十分とは言えない状況の中で、台湾



図1 国立台湾博物館の正面入口（2006年筆者撮影）

への投資はごく限られたものとなり、台湾は産業振興による自立的な経営を相当程度求められていたからである。同年一〇月に皇族の閑院宮戴仁親王をむかえての開館式典が話題になったことや入館料が無料であったことも手伝い、一〇月二八日にいたっては一日あたり二万人をこえる来館者が殺到し、急遽、入館料を徴収することが決定されている〔欧陽盛芝・李子寧 一九九九・一一六〕^②。

このように、植民地におけるはじめての博物館としての博物館として注目された台湾総督府民生部殖産局附属博物館ではあったが、この時、すでに新たな博物館構想が生まれていた。それが一九一三年に着工し、一九一五年に落成、開館する児玉総督後藤民政長官記念博物館、後の台湾総督府博物館である。

一九〇六年、当時の総督府民政長官であった祝辰巳らが、先の台湾総督であった児玉源太郎と民政長官の後藤新平の業績を記念した事業を計画し、それが総督府博物館の建設につながっていった。児玉と後藤の台湾における施政について、ここで詳細を述べることはしないが、少なくとも当時の台湾において両者が進めた数々の事業や政策は、台湾のインフラを劇的に強化し、統治体制を確たるものにさせたと言ってもよい。その二人を記念する建築物を造営するということは、植民地政府である台湾総督府にとって、台湾経営が軌道にのり、自立性が確立されたことを象徴的に内外に示す格好の機会であった。そうした象徴的な建造物を造営する場所として選ばれたのが、政治の中心であった台湾総督府にほど近い新公園内であった。一九〇六年七

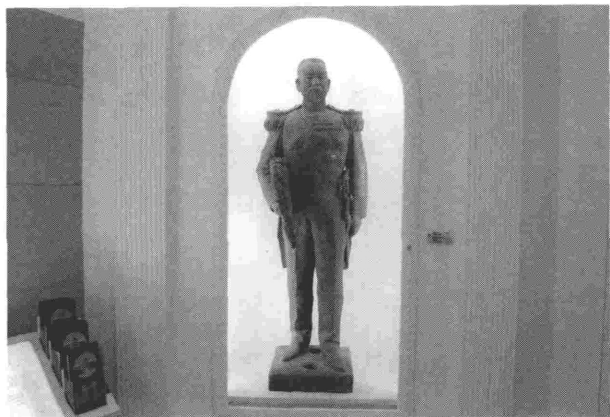


図2 現在、博物館内で展示されている児玉源太郎の銅像
(2009年筆者撮影)

月に児玉源太郎が急逝し、それにともない九月、後藤新平が南満州鉄道の総裁に就任するために台湾を離れるにともない、新公園において後藤の送別の会が催され、そこで記念館の設立が正式に声明されたという経緯があった。新公園にはもともと台湾人にとって信仰のよりどころとなってきた媽祖（天上聖母）をまつる天后宮が建てられており、度重なる台風や水害によって損壊した後に、それが修復、再建されないまま放置されていた。こうした台湾人の信仰上の状況も考慮したうえで、意図的に記念館の建設が決められたのかどうかは定かではないが、少なくとも、伝統的な台湾社会における信仰の空間に、植民地政府の博物館が建設されたことは事実である⁽³⁾。

記念館建設に要する経費は総督府の予算に加えて、各地方の公務員から職級にあわせた一定額の賛助金と一般市民からの寄付金でまかなわれた。その結果、当時の金額にして、二五六、一〇一円の寄付金が集められた⁽⁴⁾。果たして一九一五年、正面にドーリア式大柱六本を配し、中央部には象徴的な銅板ドームを戴く重厚な建築物が完成した（図1）。はいってすぐの中央ロビーにはコリント様式の装飾柱が、児玉と後藤の銅像をとりまくようにならんでいた（図2）。

記念館の設計責任者は台湾総督府土木局の技師や営繕課長を歴任していた野村一郎であった。野村は、総督府博物館の設計の前すでに、台北駅、台湾銀行といった台湾内における代表的な大型建築物の設計を手がけるだけでなく、一九一〇年にイギリスで開催された日英博覧会において台湾列品所と喫茶店の設営をまかされていた。台湾を代

表する内外の建築物の設計を行ってきた実績を有していた人物が記念館の設計にあたった。

新館の完成に伴い、民生部殖産局附属博物館に収蔵、展示されていた資料の大半は新館に搬入された。民生部殖産局附属博物館は分館として南洋諸島の資料の展示施設としてしばらく使われ、総督府博物館に南洋室が新設されたのを機に一九一七年に廃止となった。さらに、制度上、総督府博物館に大きな変化が訪れるのが、一九二〇年における殖産局の管轄から内務局学務課の附属機構への変更、さらに、一九二六年の文教局への管理替えであった。文教局への管理替えは、学務課が文教局へ昇格することにもなうものであった。産業振興から出発し文教施設へと性格を変化させていった総督府博物館の履歴がうかがえるであろう。

(2) コレクションと研究

民生部殖産局附属博物館として開館した当時、館には一万二〇〇〇点あまりの資料が収蔵されていた。発足当時の館長は、植物学者であった川上瀧彌であった。川上は自身の専門分野であった植物学以外の標本も積極的に収集するように館員に指示し、コレクションが充実していったとされている〔李子寧 二〇〇九：四二―四三〕。表一は、総督府博物館の標本資料数の推移を示したものである。殖産局の管轄から内務局へ管理換えされることによって産業関連の資料が博物館のコレクションからはずされ、代わりに新設された南洋室に新たな資料が加えられていったことが表から読み取れる。これらのコレクションを形成する担い手となったのが、川上とともに開館時に博物館に所属していた職員たちである。彼らは資料の収集と展示解説の仕事を行っていた。動物部門には伊藤祐雄、新渡戸稲造、菊池米太郎、稲村宗三、植物部門には伊藤貞次郎、島田彌市、佐々木舜一、鉱物部門には細谷源四郎、岡本要八郎、朝日藤太夫、歴史部門には山田申吾、鷹取田一郎、森丑之助、尾崎秀真が配属されていた〔阮晶鋭 一九九九：七二〕。

総督府博物館が果たした重要な役割の一つは、これらの人々によって、台湾における初めての学術資料のコレク

表 1 台湾総督府博物館の標本資料数の推移

年代	地質 (地文) 鉱物	植物	動物	人類 (苗族 高砂族)	歴史 (教育)	農業	林業	水産	鉱業	工芸 (工業)	貿易	華南 (南支 南洋)	その他	合計
1908	906	3,998	3,722	712	100	1,811	455	179	372	152	316			12,723
1910	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			19,000
1911	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			20,000
1912	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			23,970
1913	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			24,204
1914	1,618	1,906	12,578	1,903	1,042	800	621	92	7	2,829				23,396
1915	1,623	1,906	12,619	1,932	1,044	719	507	93	7	2,818				23,268
1916	1,626	1,906	12,619	1,932	1,050	741	507	93	7	2,819				23,300
1917	1,260	1,906	4,105	1,650	1,085	181	120	102	44	381				10,834
1918	1,285	1,906	4,115	1,649	1,181	182	120	93	44	374				10,949
1919	1,285	1,906	4,115	1,649	1,181	182	120	93	44	374				10,949
1920	1,329	—	4,092	1,663	1,408	119	86	90		295				9,082
1921	1,329	608	4,099	1,686	1,551									9,273
1922	1,329	—	4,246	1,742	1,684								569	9,570
1923	1,435	—	4,180	1,441	1,790							337	422	9,605
1924	1,438	—	2,357	1,419	1,790							354	249	7,607
1925	1,263	—	2,392	1,427	1,786							325	280	7,473
1926	1,276	—	2,393	1,418	1,787							473	273	7,620
1927	1,276	—	2,391	1,435	1,800							473	273	7,648
1928	1,276	—	2,412	1,468	1,801							473	273	7,703
1929	1,276	—	2,481	1,462	1,817							771	383	8,190
1930	1,794	—	2,512	1,647	2,266							828	366	9,413
1931	1,801	—	2,461	1,637	2,455							1,126	376	9,856
1932	1,823	—	2,479	1,656	2,496							1,126	376	9,956
1933	2,017	350	2,809	3,049	2,646							1,149	339	12,359
1934	2,134	382	3,437	3,071	2,692							1,149	341	13,206
1935	2,526	389	3,440	3,068	2,873							1,156	286	13,738
1936	2,202	391	3,479	3,077	2,825							1,188	286	13,448
1937	2,225	448	3,516	3,074	2,876							1,190	286	13,615
1938	2,267	4,996	3,162	2,910								1,229	180	14,744
1939	—	—	—	—								—	—	15,183
1940	—	—	—	—								—	—	14,871
1941	—	—	—	—								—	—	14,923
1942	2,330	5,024	3,194	2,935								1,239	201	14,923
1943	2,330	5,024	3,194	2,935								1,239	201	14,923

(欧陽盛芝・李子寧 1999 より作成)

ションを形成したと同時に、台湾博物学会を設立しその活動の中心として機能していたことである。台湾博物学会は一九一〇年に川上瀧彌のよびかけによつて設立された台湾発の学会である。発足当時の会員は四名であつたが、その後、会員数を増やし、最盛期には三五〇人弱の規模にまで拡大していた。また、台湾在住者だけでなく、台湾外の者にも門戸は開かれており、一九四四年には台湾の会員が一一三名であつたのに対し、台湾外の会員は一五〇名にのぼっていた〔歐陽盛芝・李子寧 一九九九・一二二〕。学会誌であつた『台湾博物学会会報』は一九四五年二月に休止するまでの間、二五二号発行された。その内容は、動物学、植物学、地質学といった自然科学の諸分野に加え、考古学や人類学、民族学といった人文系の内容のものまで幅広く含んでおり、当時の台湾における學術研究の一翼をしっかりと担っていた。また、一九三三年には、博物館の創立二五周年を記念して、台湾博物館協會が設立され、会誌となる『科学の台湾』が創刊された。同誌は一九四三年までの間、五四号が発刊された。

(3) 博物館展示の受容

こうした博物館の展示は当時の台湾の人々にどのように受容されていたのかを理解する一つの糸口は来館者数である。つまり、どれだけの人々が関心をもち来館しているかどうかは、博物館の展示が社会に与えた影響とも少なからず関係しているからである。台湾総督府博物館はこの点においてはかなり社会的な影響を与えていたと考えてよい。それは相当数の人々が博物館に足を運んでいるからである。

表二は毎年の来館者数、表三は一九三二年から一九三八年における来館者の内訳を示したものである。例えば、もつとも開館日数の少なかった一九一五年の来館者数は六四、四五五である。この年の台湾における人口は戸口調査の資料から約三四八万であることがわかつてるので、人口の約一・八五%にあたる来館者数があつたことになる。⁵⁾特に興味深いのは来観者の内訳である。日本人と台湾人との間で来館者数の大きな差異は見られない。もつとも、人

表2 台湾総督府博物館の来館者数

	来館者数		開館日数		来館者数		開館日数
	合計	1日平均			合計	1日平均	
1908	43,076	879	49	1926	189,178	637	297
1909	21,919	73	294	1927	211,140	721	293
1910	19,528	64	301	1928	140,313	464	302
1911	39,923	132	301	1929	178,372	603	296
1912	48,444	161	300	1930	154,516	513	301
1913	56,612	189	299	1931	151,375	506	299
1914	53,048	178	298	1932	125,936	424	297
1915	64,455	274	235	1933	169,986	567	300
1916	52,078	182	286	1934	272,827	909	300
1917	51,363	171	300	1935	1,269,900	5,358	237
1918	64,975	215	302	1936	184,264	534	345
1919	102,162	346	295	1937	280,357	829	338
1920	169,551	573	296	1938	172,792	511	338
1921	312,371	1,044	299	1939	154,136	456	338
1922	363,608	1,293	281	1940	147,683	442	334
1923	475,242	1,697	280	1941	259,819	766	339
1924	323,292	1,066	303	—	—	—	—
1925	243,999	2,406	270				

(欧陽盛芝・李子寧 1999より作成)

口における日本人と台湾人との比率を考えると、日本人の人口に対する来館者の割合は高い。また、日本人と台湾人の男女比を比較した場合、台湾人の来観者における女性の比率が比較的高いことがうかがえる。年齢層等もあわせて詳細に検討する必要があるが、少なくとも、博物館へ来館するという点について日本人と台湾人の男女による大きな差異はなかったと考えてよいであろう。

また、博物館側も来館者の積極的な誘致を行っていることは注目に値する。先述した台湾博物館協会が、設立した一九三三年の翌年以降、毎年十一月の第一週を「博物館週間」と定め、特別展の開催や夜間開館といった積極的な来館者対応を行っている。なかでも、各種学校を対象にした標本採集の競技会を企画するなど、通常の見学に留まらない内容をもって、学校と博物館とをつなぐことを試みていた「欧陽盛芝・李子寧 一九九九・一二五—一二六」。

もちろん、博物館の展示が来館者にどのように受けとめられていたかを理解するためには、当事者の言説も含

表3 台湾総督府博物館の来館者の内訳（1932～1938年）

来館者類別		年度						
		1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938
日本人	男	37,989	51,217	71,554	401,587	57,595	73,796	47,927
	女	20,129	28,909	41,005	231,924	34,872	52,386	29,894
台湾人	男	45,816	58,447	76,122	314,612	52,925	90,395	55,734
	女	21,534	30,505	63,461	306,856	38,524	62,952	38,172
合計 (加原住民、外国人)	男	84,093	110,348	168,094	727,798	110,783	164,677	104,387
	女	41,843	59,638	104,733	542,102	73,481	115,680	68,405
総計		125,936	169,986	272,827	1,269,900	184,264	280,357	172,792
1日平均		424	567	909	5,358	534	829	511

（歐陽盛芝・李子寧 1999より作成）

めた詳細な資料が不可欠となる。しかしながら、当時の総督府博物館には相当数の来館者があり、そこには、施政者である日本人と植民地の住人である台湾人の両者が同程度に含まれていたことは、博物館の存在が当時の台湾の社会のなかにかなり受容されていたと考えてよいであろう。⁶⁾

3 総督府博物館の展示と原住民族資料

(1) 常設展示と特別展示会

資料の制約上、総督府博物館が実際にどのような常設展示場を擁していたかの詳細について本稿で紹介することはできないが、基本的には、原住民族、動植物、地質鉱物、歴史の四つの展示室で構成されており、少なくとも大掛かりな展示の模様替えが行われた様子は持ち合わせている記録からはうかがえない。殖産局附属博物館の展示に農業や林業、水産、貿易等の殖産に関連した資料が展示されていたことと比較すると、総督府博物館にはやはり学術標本中心の展示が設置されていたと言えるだろう〔劉寅 一九九九・二〇三〕

原住民族の展示室は高砂族室と称され、原住民族の人たちが日常的に用いる生活用具や儀礼具、装飾品が展示されていた。動植物の展示室では、台湾のほ乳類、は虫類、鳥類、昆虫等の標本やレプリカが展示され、植物については、米、茶、煙草、果実などの栽培植物に加え、高山植物や熱帯性植物といった台湾の植

物相がとりあげられていた。地質鉱物の展示室には、南洋地域の資料も一緒に展示されており、鉱物標本に加えて、華南地方ならびに南洋地域の人文地理学的内容をもった展示となっていた。現地の様子を撮影した写真パネルと同時に、服飾や日用品、家屋模型などもあわせて展示されていたようである。歴史の展示は、石器時代、オランダ、スペイン時代、明代ならびに鄭成功の時代、清朝時代の四つの区分に分けられていた。ここで興味深いのは、日本の歴史についてはほとんど触れられておらず、しかも展示における歴史区分は、一九九〇年代以降の台湾史を中心とした新たな歴史観である「認識台湾」で提示されてきた内容と酷似している点である。

常設展示場の変更がほとんど行われていなかった一方で、特別展示会や普及事業が時折、実施されていたこともわかつている。劉寅によれば、総督府博物館の展示活動は大きく三つの時期に分けることができるという「劉寅一九九九・二〇六」。すなわち、新たに完成した展示場を中心とした時期、常設展示の内容はほとんど変更せずに、特別展示やその他の事業を展開する一方で、資料の収集を積極的に行い、コレクションを充実させた時期、そして、第二次世界大戦の影響によって博物館活動そのものが停滞していった時期である。総督府博物館の開館以後、一九四五年までの間に開催された特別展示会では、確かに多様な内容を扱っているが、原住民民族に関連した特別展示が行われる機会はそれほど多くなかったようである。

(2) 原住民民族コレクション

総督府博物館における原住民民族関連資料は大きく分けて、二つのコレクションから構成されていると考えてよい。一つは森丑之助によって比較的初期に収集された資料であり、もう一つは一九二九年に尾崎秀真が中心となって収集した一七六〇点の資料である。これらは佐久間財団原住民民族コレクションとよばれている「李子寧 二〇〇九・七〇—七五」。

森丑之助は一八九五年に陸軍付きの通訳として台湾に渡って以降、日本人にとってはほとんど未知の土地であった山岳地域を踏査していった。ほぼ同じ時期に東京帝国大学からの派遣で台湾の民族学調査に訪れていた鳥居龍蔵と出会い、彼の調査助手をつとめるうちに、原住民族の調査や研究に目覚めるようになった。こうした背景があり、森は殖産局附属博物館の準備段階からこれに携わり、主として原住民族の資料収集にあたったのであった。森は殖産局附属博物館ならびに総督府博物館の原住民族関連の展示の開設に尽力した。森は、殖産局附属博物館の設立に先立つ一九〇三年に大阪で開催された、第5回内国勸業博覧会でも原住民族の展示にたずさわった経験があり、博物館の展示設営にも適した人材であった。森がこれらの博物館における原住民族展示を中心になって取り組んだことによって、原住民族展示にある一つの特徴が生じていくことになる。それは、展示において採用された民族の分類は、森が当時考えていた原住民族の構成に一致していたということである。当時の展示室を完全に復元する資料を筆者は持ち合わせていないが、断片的な記述から当時の原住民族の展示では、アミ、ヤミ、ブヌン、ツォウ、タイヤル、パイワンが紹介されていたようである〔阮晶鋭 一九九九・七六〕。この分類は森が通常用いていた分類である。台湾総督府の蕃務本署ならびに臨時台湾旧慣調査会の囑託として原住民族の調査にあたった森は、おそらくこの時期にもっとも広範に台湾を踏査しており、分類作業にあたり各集団の相対的な差異を相当に意識していた。例えば、タイヤルとセデックとの相違は認められるものの、それを他の集団との差異を比較した場合には、大分類には相当しないと判断した点などがそれにあたる。結果的に、森の分類は最も簡素化されたものとなり、それが総督府博物館の原住民族展示の中にも反映されていたと言えるだろう。⁽⁹⁾

一方の尾崎秀真は、一九〇〇年に渡台し台湾日日新報の記者となった。もともと漢学や歴史学に関心のあった尾崎は、一九二二年には台湾総督府の史料編纂委員となり、台湾の先史学についていくつかの論考を著すようになる。個人的にも考古学資料や骨董品を収集する好古家であつたらしく、一九二六年から一九二八年の間、総督府博物館の

囑託となり、翌一九二九年の博物館の収集活動にも参加したという経緯があった。尾崎の収集は森の収集とは少し趣を事にしていたようである。森は原住民族の生活に関わる資料を実際に集落に赴き、収集したり、実際に自分が踏査した遺跡の資料を採集するという方法をとっていたが、尾崎は各地に存在する骨董屋などからも、状態のよい資料や遺物を買収していたことがうかがえる〔松村瞭 一九二七・三七二〕。したがって、尾崎がその収集に係った資料は当時ですでに希少性のあるものが少なくない。例えば、早くから漢族化が進み、物質文化の変容が進んでいた平埔族の資料がこの時期に収集されていたことは、後になって、総督府博物館のコレクションのもつ社会的意義に少なからず影響を与えていくことになる。

4 台湾省博物館への移行

第二次世界大戦が集結し、日本が台湾から撤退するのにとまない、総督府博物館は台湾省博物館と名称をあらためることになった。台湾省行政長官の名前で、台湾省博物館の組織規定が設置目的等を含めた形で発令された。規定には、博物館の研究組織として、歴史、民族考古及び民俗、地質及び地理、動植物生産、工芸美術、南洋調査という六つのグループが挙げられており、日本時代に行われていた研究内容がおおむね反映したような形態をとることとなった〔莊維成 一九九九・九九〕。

一般の建造物に比すれば、それほど深刻な被害は受けなかったものの、やはり博物館も戦災を少なからず受けており、また、それまで館の運営の中心であった日本人が帰国することにもない、博物館の機能が滞ると判断した新政府は、博物館を一時閉館し、再開館のための準備作業にはいることを決定した。総督府博物館では、展示の解説パネル等は日本語表記であったため、それらを中国語に翻訳する作業等に追われながら、約半年後の一九四六年四月に台

湾省博物館としての開館を果たした「劉寅 一九九・二〇七」。当時の展示場は、戦災で使用できなくなった図書館に博物館の一階部分を貸していたため、二階部分のみの活用となっていた。この時の展示は総督府博物館のものを縮小、再構成した内容となっており、南洋地域の服飾、彫刻品をはじめとする工芸品、人形劇に用いる人形、動植物ならびに鉱物標本、そして、原住民族に関連した資料が展示されていた。原住民族の展示において重要なのは、原住民族を「十大族群」として展示した点である。総督府博物館の展示が森の採用した六族分類を基準にしていたのに対し、戦後の国民党政府が採用した九族分類に準じて展示を変更したことは、原住民族の社会構成が従来と異なるということを、一般社会に明確に示すことを意味している。

戦後間もなく、急ぎ足で再開された展示は、一九四九年に一部変更されることになる。南洋地域の展示が撤去され、代わりに鄭成功がオランダを駆逐した内容や、明清代の台湾への入植に関連した資料や図版、また、数は少ないが清代の民俗資料が展示されることになった「劉寅 一九九・二〇八」。戦後の混乱が収束しつつあるなか、台湾省博物館の展示から、日本時代ならではともいえる南洋地域に関連した展示を排除し、台湾由来のものを再び展示していった過程がうかがえる。植民地国家の博物館の要素が排除され、国民国家の博物館としての再構築をはかるねらいがあったとも言えなくはない。

一九六一年、台北図書館が新たな建物へ移動したのを機に、台湾省博物館の展示は全面的な改修が行われることになった。この時の展示責任者は、日本統治時代に日本人研究者と深い交流があり、自らも物質文化の優れた業績をあげていた陳奇祿であった。約一年の改修期間を経て、新たに作られた展示空間は、人類学陳列室、動植物学陳列室、地学陳列室、文教活動室の四つに区分されていた「劉寅 一九九・二〇九—二一〇」。人類学陳列室はさらに、二つの展示空間に分かれており、一つは原住民族の展示が、もう一つは台湾史ならびに南洋地域の民族資料の展示という、いわば、総督府博物館における原住民族展示と歴史展示と南洋展示とをまとめ合わせた内容となっており、ここ

でも中国史に関する本格的な展示は行われなかった。また、地学陳列室には、進化や生態環境一般に関する展示が行われており、一般的な自然史教育が意識された内容となっていた。展示の再構築に並行するように研究組織の編成も変更となり、人類学、地学、動物学、植物学、そして教育という五つの部門が設置された。民族学という名称が排され人類学に変わった背景には、中華民国とアメリカ合衆国との関係を無視することはできない。戦後、大陸中国とのせめぎ合いのなかで、台湾はアメリカ合衆国との関係を強化していく。学術面においても合衆国の影響は強く、合衆国で一般的である人類学 (Anthropology) が用いられていくことになる。

5 博物館の社会的位置づけとその中での原住民族文化

台湾省博物館は後に台湾省の廃止にともない国立台湾博物館とその名称を変える。また、数回にわたり展示の改修を行うが、台湾史、動植物と鉱物、環境史、そして原住民族という基本的な展示内容は継承されていた。ある意味では、植民地時代に設立された総督府博物館の基本的な展示コンセプトが踏襲されてきたと言ってもよいであろう。植民地国家から国民国家への移行にともなって、国立博物館の展示が大きくは変わらなかったとも言える。こうした状況が生じたことにはいくつかの要因が考えられる。

まず第一に、総督府博物館が設立した時点において、ナショナリズムを高揚する性格を持ち合わせていた殖産の内容がはずされたということを挙げることができるだろう。換言すれば、博物館が台湾そのものを理解するための場所に特化した状態が続き、展示されてきた資料や収蔵されている資料についてもその属性が政治的に中立なものが多かったということである。これは、総督府博物館とそれを継承した台湾省博物館の展示が、研究者の学術研究や収集活動を礎にしていたからであるとも考えることができる。

第二に重要なことは、中華民国政府は国家の威信をしめす媒体として、故宮博物院という別の巨大な博物館を別に造り上げていたということである。中華民国政府にとって紫禁城より搬出した中国歴代王朝の宝物はもともと自らが所有していたものであり、自分たちが正統な継承者であるという原則が変わることはなかった。一方で、日本統治時代から台湾に住んでいた漢族系住人にとっては、中華民国政府がもちこんだ故宮の宝物は大陸中国のものであり、それをおさめるために建てられた故宮博物院もまた外来政権の私有施設ととらえていた可能性は否定できない。逆に、新たな施政者となった中華民国政府にとって、日本が残した総督府博物館はあくまでも対戦国だった側の手によって創造されたものであり、そこに国家の威信を示したり、ナショナリズムを高揚させるための宝物を設置することはありえない選択であったとも言える^⑩。さらに、中国正史と中華芸術を展示するために国立歴史博物館を新設したことは、総督府博物館を引き継いだ台湾省博物館が、実際のところ、新たな統治政府の目には国家の博物館としての役割を託せる空間とは必ずしもうつっていなかった可能性も否定できない。

いずれにしても、こうした背景のもとで台湾省博物館が存続していったことは、台湾の博物館建設に少なからぬ影響を与えていくことになる。すなわち、原住民族、自然史、そして台湾史という総督府博物館以来、受け継がれてきた展示の内容は民主化が進む八〇年代以降、それぞれの内容を主題とする国立の博物館に発展していくからである。原住民族の文化は台東にある国立史前文化博物館に、自然史は台中の国立自然科学博物館に、そして、台湾史は台南に開館した国立台湾歴史博物館にといった具合である。見方を変えみると、民主化が進む台湾において要請が生じた内容の展示が戦前の総督府博物館にすでに設置されていたとも言える。一方で、台湾省博物館がある意味では外来政権ともいえる第二次大戦後以降の国民党施政下において、社会に受容されつづけてきた展示を維持してきた意味ではやはり大きい。もし、それらが新政権のつむぎだしナショナリズムに追従するような展示を展開していれば、現在のような多様な機能をもつ国立博物館が台湾に建設されていたかどうかについては疑問の余地が残る。

もう一点、言及しておかなければならないのは、台湾省博物館が維持した展示の内容に原住民族の文化が含まれていた点である。もちろん、植民地時代に形成された原住民族コレクションが展示に有効に活用されたという実務的な理由もあったであろうが、展示の作り手が日本人から台湾人にかわっても、原住民族の文化は博物館で展示する対象であり続けたのである。これは、台湾を理解するうえで、その歴史や風土、環境とともに、原住民族のことを知っておく必要があるという認識が変わらなかったことを意味している。

まとめ

国家が博物館をもつことの背景には、政治イデオロギーの社会への浸透や内外に対する権威性の維持といった施政者側の思惑が存在することも少なくない。一方で、利用者である国民に受容された博物館は、体制が変わった場合でも大きく機能を変えないこともあることが、台湾の総督府博物館の事例で明らかになった。とりわけ、総督府博物館が内包していた、台湾史、原住民族、自然誌の展示が、民主化の進んだ台湾において、それぞれを主題とする国立博物館に展開していったことは、外来の施政者が意図的に設立した他の博物館とは大きく異なる経緯をたどったことになる。

日本統治時代の台湾はもちろん植民地国家である。しかしながら、日本が日清戦争の後、台湾を植民地とするまでは、台湾の住民が国家や国民という意識を強く抱く機会はそれほど多くはなかったと考えてよい。日本の統治直後に生じた台湾独立運動も、清朝の残留官吏や一部の漢族系住人を中心として引き起こされたものであり、大半の住民は日本統治を通して、はじめて国家の存在を意識するようになったと言ってもよいだろう。そうした日本統治時代に台湾を説明するための要素として、台湾史、原住民族、自然誌が博物館の中に組み込まれていたことは注目に値する。

これは、植民地時代の施政者であった日本人が作り上げたというよりは、当時の台湾に向けられた学術的関心がそのまま博物館の展示や収集に反映された結果であると解釈したほうが適切であろう。

限られた資料のなかで、台湾において、日本の総督府博物館が植民地時代の台湾の中でどのように運営されていたのか、そして、それが植民地時代の終結とともにどのように変化していったのかを考えると同時に、その中で、社会における少数派であった原住民の社会や文化がどのようににとらえられてきたかについて若干の考察を加えた。

植民地において設立された博物館が、植民地時代を終え国民国家と転じていくなかで、どのようにその役割を変化させていくのか、また、国民国家のために新たに建設されていく博物館とどのような関係をもつのかといったことは、植民地経験をもつ他の地域や国で共通した課題となる。今後、比較の視点から考えてみることも必要となるであろう。

注

(1) 台湾ナショナリズムの起源と展開については、若林正丈が簡潔かつ明解にまとめている「若林正丈 二〇〇三」。それによると、台湾ナショナリズムの起源は、日本植民地時代に台湾土着の住民によって主体的に形成された「台湾人」意識が、その後の中華民国施政下の早い段階において、「中国」を対立する他者として対峙させるべきものとして位置づけられたところに求めることができる。その契機となったのはもちろん一九四七年に生じた二・二八事件である。詳しくは「若林正丈 二〇〇三」を参照。

(2) 後の陸軍参謀総長、元帥を歴任。

(3) この点について、台湾における博物館教育や博物館の歴史について論考を重ねている蔡世榮は、当時の台湾人にとって、毎日のように参拝し、神の住居である「廟」が突如姿を消し、標本の収納されたガラスケースが多数置かれた、近代建築の「博物館」が登場したときの心境は如何ばかりであったろうかと述べている。

<http://www.bunkanken.com/journal/article.php?id=2222> 参照 (二〇〇九年二月五日確認)。

(4) 現在、国立台湾博物館で配布されている児玉・後藤銅像陳列室には、総督府博物館建設の経緯が詳しく記されたパンフレットが

中国語、英語、日本語で用意されている。また、両者の銅像は現在も国立台湾博物館の中に展示され、丁寧な解説とパンフレットが備えられている。

(5) 人口の一・八五%は例えば、現在の日本の場合、約二三〇万人に相当する。

(6) 当時の展示の解説パネルやキャプションが日本語と台湾語(漢語)の併記であったかどうかについては検証する十分な資料を持ち合わせていないが、総督府博物館から台湾省博物館へ移行する際に、翻訳作業等が膨大であったという記録からすると、植民地時代には漢語の運用はほとんど行われていなかったと考えてよいであろう。

(7) 台湾総督であった佐久間佐馬太との財団との関係については筆者はそれを明確にする資料を持ち合わせていない。

(8) 二〇〇八年四月現在、台湾の原住民族は、タイヤル(泰雅, Atayal)、サイシャット(賽夏, Saisiyat)、ブヌン(布農, Bunun)、ツォウ(邹, Tsou)、プヌム(卑南, Puyuma)、アミ(阿美, Ami)、バイワン(排湾, Paivan)、ルカイ(鲁凯, Rukai)、ヤミ(雅美, Yami (Tao))、サオ(邵, Thao)、クヴァラン(噶瑪蘭, Kvalan)、タロロ(太魯閣, Tarok)、サキザヤ(撒奇萊雅, Sakizaya)、『セデック(賽德克, Seideq)』の十四の民族集団で構成されている。このうちのタイヤルからヤミまでの九族が先住民族を構成する基本的な民族集団であるという考え方が第二次世界大戦後の台湾社会に受容されてきた。日本時代における原住民族の分類については拙稿「野林厚志・宮岡真央子 二〇〇九」を参照。

(9) 森の分類は、『日本百科事典』(第六巻、一九一二年)に記載されたこともあり、日本の一般社会にも民族の分類という問題が部分的にはあるにせよ紹介されることにつながった。

(10) もちろん、資料の物量のことを考えると物理的に不可能であった。

参考文献

- 阮 晶銳 一九九九「博物館の創建」(『台湾省立博物館創立九十年專刊』七〇—七七、台北、台湾省立博物館)
歐陽盛芝・李子寧 一九九九「博物館の研究——個歷史的回顧」(『台湾省立博物館創立九十年專刊』一一四—一八九、台北、台湾省立博物館)
莊 維成 一九九九「台湾省立博物館の行政」(『台湾省立博物館創立九十年專刊』九八—一一三、台北、台湾省立博物館)
高橋雄造 二〇〇八『博物館の歴史』東京、法政大学出版局
野林厚志 二〇〇八「博物館展示における台湾原住民族文化」(『台湾原住民族研究』第一二号 p.p. 三三—五九、日本順益台湾原住民族研

究会)

野林厚志・宮岡真央子 二〇〇九「台湾の先住民とは誰か——台湾原住民族の民族分類史と〈伝統領域〉概念からみる台湾の先住性」

(「先住民とは誰か」窪田幸子・野林厚志共編、pp.二九三—三二七、世界思想社)

林泊佑主編 二〇〇二『国立歴史博物館沿革與発展』台北、台北国立歴史博物館

松宮秀治 二〇〇三『ミュージアムの思想』東京、白水社

松村 瞭 一九二七「台湾恒春墾丁庄貝塚」(『人類学雑誌』四二卷九号、三七二—三七三)

李子寧主編 二〇〇九『百年の物語』国立台湾博物館

劉 寅 一九九九「九十年来展覽活動的回顧」(『台湾省立博物館創立九十年專刊』二〇二—二二七、台北、台湾省立博物館)

若林正丈 二〇〇三「現代台湾における台湾ナショナリズムの展開とその現在の帰結——台湾政治觀察の新たな課題——」(『日本台湾学

会報』第五号、pp.一四二—一六〇、日本台湾学会)